

氏名(本籍)	たか はし あきら 高橋 晃(静岡県)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博乙第1,468号
学位授与年月日	平成10年11月30日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	確信度評定と再認判断の情報処理特性
主査	筑波大学教授 教育学博士 海保博之
副査	筑波大学教授 教育学博士 太田信夫
副査	筑波大学教授 学術博士 菊地正
副査	筑波大学助教授 博士(心理学) 吉田茂

論文の内容の要旨

1. 論文の構成

本論文は、目的である第1部(第1章～第3章)、方法である第2部(第4章～第6章)、結果・考察である第3部(第7章～第8章)、文献目録からなり、326ページ(1ページあたり783文字で、400字詰め原稿用紙638枚に相当する)より構成されている。

2. 論文の内容

本論文は、過去事象についての再認判断と、その判断がどの程度正しいと感じるのか、という“主観的確信度”の関連を扱った実験研究である。

<第1部 確信度と記憶>

日常的に、人間は、自分の行った判断について、確信を持って行う場合には正しいことが多く、確信が低い場合には誤りが多くなることを知っている。この“常識”については、感覚知覚領域においてはほぼ正しいことが認められているが、それ以外の領域については、確信度と正答率が必ずしも高い相関を示していないことが過去の研究からわかっていた。

さらに、この確信度とパフォーマンスの対応関係の特例的現象として、再認判断実験における旧項目(ターゲット)と新項目(ディストラクタ)では、確信度と正答率の関連が異なっていることが報告されていた。この場合には新旧項目が混在して行われる再認判断において、旧項目は確信度と正答率が正の相関関係を示していたが、新項目では確信度と正答率が無関係になり、正答率は確信度に依存せず一定の値を取った。本研究はこの再認判断における確信度と正答率の対応関係に注目し、(1)なぜこのような新旧項目の乖離が生じるのか(新旧乖離現象)、(2)なぜ新項目は確信度に依存せず一定の正答率をとるのか(CR率一定現象)を個人実験によって追求した。

<第2部 確信度と再認判断の関連についての実験的検討>

第4章では、基本的な実験手続きの記述、そして先行研究と同様の材料を用いての現象の生起を確認した。

実験1では、カテゴリ単語材料・数字材料・無意味綴り材料を用いた偶発学習課題と、それに続く再認判断・確信度評定実験を行った。結果として、すべての材料において新旧乖離現象およびCR率一定現象が生じることを確認した。

第5章においては、第4章で確認されたCR率一定現象の原因の追求を行った。

実験2においては、旧項目の記憶痕跡を弱める操作を行ったところ、確信度が高くなるにつれて新項目の正答

率がかえって低下するCR率逆転現象を見いだした。この原因として、記銘時あるいは判断時の記憶痕跡の弱さがCR率逆転現象に結び付いているものと考えた。実験3においては、記銘時・判断時のいずれの痕跡強度がCR率逆転現象に関連しているのかを調べるため、学習時の直後と一週間後で再認判断を行った。結果として、判断時の痕跡強度が弱い場合にCR率逆転現象が生起していた。ここから、判断時に記憶痕跡が弱い場合には、被験者は本来存在しなかった項目を、強い確信を持ってあったものと判断することがあることがわかった。考察として、判断の際に被験者が誤った手がかりを用いること（ソースモニタリングエラー）、そしてその誤った手がかりに対して強い確信をもつ場合にCR率逆転・一定現象が生じるものと考えられた。すなわち、CR率逆転・一定現象は、記憶痕跡強度の強弱に依存するものではなく、あくまで誤った手がかりの参照によって生起するものと仮定した。実験4においては、この仮説を確認するため、記憶痕跡の強度を大きくした状態で、実験を2回繰り返した。ここでは、2回目の実験の新項目の半分に1回目の旧項目と同じ項目を採用した。結果として、記憶痕跡の強度が大きかったにもかかわらず、1回目の実験で旧項目として出現し、2回目の実験においては新項目であった項目についてのみ、強いCR率逆転現象が生じた。これは、被験者が1回目の実験エピソードを、誤って2回目の実験のための判断手がかりとして採用したことによるエラーであるといえる。ここから、CR率逆転現象の原因がソースモニタリングエラーである可能性が示された。

第6章においては、CR率逆転・一定現象がソースモニタリングエラーが原因であると仮定した場合に、そうしたエラーが生じない条件を設定することで、CR率逆転・一定現象が消失することを確認した。

実験5・6においては、ソースモニタリングエラーを防ぐことにより、CR率逆転・一定現象を消失することを予測した。実験5では、判断の際に意図的に3秒の間隔をあけることで、瞬間的に誤った手がかりを利用して判断を行うことを防いだ。結果として、長期提示・短期提示のいずれにおいても新項目の正答率が確信度と正の相関を示し、CR率逆転・一定現象は消失した。実験6においては、再認判断と確信度評定を同時に行う手続きを利用し、判断の際に記憶情報以外の手がかりが侵入しない条件を設定した。

以上の結果、CR率逆転・一定現象は消失し、この現象がソースモニタリングエラーを原因とするものであることが確認された。

<第3部 本研究の総括>

第7章においてこれらの結果を統合し、全体を通じての分析を行った。第8章においては、はじめに、旧来問題となっていたMOC曲線の特性を、本実験の結果ならびにシミュレーションの比較から分析した。続いて、新旧乖離現象およびCR率逆転・一定現象の原因が考察された。新旧乖離現象の原因としては、再認判断時に旧項目と新項目の利用する手がかり情報が異なっていることが考察され、そのモデルが記述された。また、CR率逆転・一定現象の原因としては（1）新項目の判断時に誤った情報源を手がかりに再認判断を行ってしまう（ソースモニタリングエラー）、（2）実験1から4を通じて観察された、“あった”という判断が確信度が高いところに集中し、また“なかった”という判断が確信度の低いところにかたよる傾向（反応傾向）、の2つが原因であることが明らかになった。この説明は、本実験のような再認判断に限らず、日常生活において自信を持って行った行動のパフォーマンスが実際には低いことがある、という現象の説明として適用が可能である。また、実験的には、確信度を利用して行われる再認記憶の実験結果には、こうしたCR率逆転・一定現象が生起する可能性があるため、手続きとしては必ず確信度と再認判断を同時に行わせる手法を利用しなければならないと考察された。実際面においては、見ていない事象についての再認判断と確信度評定にはこうしたシステムチックなエラーが生じることから、警察の目撃者証言の採取等の手続きについての注意点が指摘された。

審査の結果の要旨

これまで、再認という遂行指標と確信度という主観的な指標との間には、線型の相関関係を仮定して、さまざま

まな心理現象は分析されてきた。しかし、両者の間の関係は、それほど単純ではないことを、本論文では子細な実験とシミュレーションとによって明らかにし、今後のこの種の方法の利用について一つの方向性を示した。この点で、本論文は、高く評価されるが、一方では、記憶材料と実験事態に固有の結果である可能性も残されており、今後、異なる実験事態で記憶材料を変えた実験の必要性も指摘された。

よって、著者は博士（学術）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。